

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1292100383		
法人名	社会福祉法人 福祉楽団		
事業所名	グループホーム実叻パークサイドテラス		
所在地	千葉県習志野市実叻本郷23-8		
自己評価作成日	令和8年2月15日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.gakudan.org/service/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人NPO共生
所在地	千葉県習志野市東習志野3-11-15
訪問調査日	令和8年3月2日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

■ケアを考える
 ナイチンゲールの看護論を基盤とし、科学的根拠に基づいたケアの実践を目指しています。理論の浸透を図るため、定期的な職員研修を実施するとともに、ケアカンファレンスを通して実践の振り返りと質の向上に取り組んでいます。

■くらし(生活)をよくする
 利用者の「持てる力」を尊重し、日々の生活の中でその方の得意なことや役割を發揮できる支援を行います。また、他事業所や地域との距離の近さを活かし、外出や地域交流の機会を大切にすることで、社会とのつながりを継続できる環境を整えています。そして、住み慣れた環境の中で、最期までその人らしく暮らし続けられる施設を目指しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当施設は、2025年3月に開業、こども、障害のある人、高齢者、など分野横断的な複合型地域拠点の中核として、京成本線「実叻駅」から徒歩約15分、大きな公園や県立高校に隣接する自然豊かな環境に恵まれた施設の中にある。理論の浸透を図るため、定期的な職員研修を実施するとともに、ケアカンファレンスを通じて実践の振り返りと質の向上に取り組んでいる。利用者の暮らしについては、本人の持てる力をナイチンゲールの看護論をもとにアセスメント評価をして、認知症はあるが専業主婦で家事が得意だった方にはお味噌汁を作るという日常生活の中で、それぞれの方がそれぞれの役割を再発見してもらいたいということを意識して支援するよう実践している。利用者アンケートでは、「『普通の生活』『いつものまぢ』『いつもの生活』がおだやかに送れています。」と、感謝の声が届いている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	事業所様自己評価記入欄	外部評価、評価機関記入欄	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念の共有については、入職時に管理職より個別で研修を実施している。法人全体としても、年1回は理事長からの講義をオンラインにて実施し、拠点を超えての理念浸透の機会を設けている。開設して1年未満の拠点のため、マネジメント職員が各MTGに参加し理念と実践が結び付けられるように働きかけている。	理念の共有については、入職時の研修や理事長からの年1回のオンライン講義など、拠点を超えての理念浸透を設けており、職員都合の業務にならないように、利用者、当事者視点から始まることを意識して支援している。研修参加できない職員には、録画によるアーカイブがオンデマンドで見られるよう、機会を逃しても別の機会受講できる体制を整えている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	複合型の拠点となっているため、サービスにとらわれず日常においても、地域の方が立ち寄り、過ごす場所となっている。それらの縁でボランティアの受け入れも行っていること、他サービスと協力して地域に出向くことも積極的に行っている。	施設内には、地域交流スペースが設置され、隣接の高校生が良く利用している。畳の部屋には、高齢者の方をお連れしてお話をすることもある。先日、ここにふらっと見学に来た人で、ボランティアをしたいという方がいて、相談した結果その後、週に1回程度ボランティア活動に入ってもらっており、複合型の拠点としての機能が発揮されている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	上記にあるとおり、日々地域の方が過ごすだけでなく、関連機関と協同した勉強会などを実施し、専門性を高める取り組みも行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2カ月に1回運営推進会議を実施し、地域、家族、関係機関へ運営状況について発信、意見交換を行っている。また、定期的に地域、家族、関係機関より見学の問い合わせあり、都度意見を行い、質の向上を図っている。特に利用者家族においては、介護記録を通じて日々情報を共有し、タイムリーな報連相を行っている。	2カ月に1回開催している運営推進会議に参加される皆さんから、割とポジティブな意見がでており、「地域とつながっていて、複合的で色々なサービスと連携できるのは魅力的」といった声をもらい、地域とのつながりが評価されていることが確認できる。また、介護記録を通じたタイムリーな情報共有に対しては、ご家族から「ここまで詳しく教えてもらえるなら安心だ」とアンケートに多くの声があがっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	同施設内に、看護小規模多機能型居宅介護の事業を併設しているため、日常的に包括支援センター、医療機関、居宅介護支援事業所等と連携を図り、スピード感のある対応で相談、支援を行っている。	市の担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組み状況等を伝えながら、協力関係を築いている。当施設は、看護小規模多機能型居宅介護の事業を併設しているため、グループホーム入居希望者から相談を受け、定員の関係で受けられない場合なども他の事業者さんへのご案内も含めて、丁寧に対応している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	入職時の研修や、年2回法人内研修として「虐待防止と身体拘束等の適正化」について学ぶ機会を設けている。また、家族にも契約時に上記の内容について説明し、ご家族の協力のもと支援を行っている。	入職時の研修や、年2回の法人内研修として「虐待防止と身体拘束等の適正化」について学ぶ機会を設けており、単なる知識ではなく実際の技術や環境調整に力を入れて定着させている。身体的虐待でも、レベルを5段階に分けて、軽度に応じた対応策など具体的な事例を基に確認し合っている。玄関の施錠についても季節や時間帯などのリスクを考慮し、利用者本人に寄り添った対応とご家族の理解を含めて、慎重に対応している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	上記に同じ。必要時には速やかに複数の職員と事例を検討し、対応をすすめている。		

自己	外部	項目	事業所様自己評価記入欄	外部評価、評価機関記入欄	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	入職時研修、法人内研修として「権利擁護に関する制度」について学ぶ機会を設けている。必要に応じて第三者委員への情報共有をおこなっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は、管理職または相談員（社会福祉士、ケアマネ）が対応を行っている。必要書類について、疑問や不明瞭な点があれば都度、丁寧に説明を行っている。また、説明者の質の担保のために法人内で、契約事務に関する研修も実施している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年4回入居者家族に「ご意見はがき」を送付、意見や要望などを管理者はじめ、現場職員まで伝わる仕組みを設けている。また、介護記録を通じてタイムリーに情報共有実施しており、メッセージや電話、面会時などにご家族より意見をお伺いしている。要望等は可能な限り運営に反映させている。	ご利用者やご家族等の意見・要望は、管理者・職員で共有し、外部者へ表せる機会を設け運営に反映させている。年4回のご意見はがきにはきちっと返信しており、介護記録もご家族に一部公開できるようになっている。その中で出てきた意見等に対する改善結果などは、拠点だけにとどめずに、グループウェアなどを活用して発信し、グループ全体のモチベーションアップに繋がるよう運営に活かしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理職が集まる運営会議、ユニットで行うMTGの他、他拠点を含めた経営会議にて、職員の意見、要望、提案について協議している。	運営会議やユニット会議等で職員の意見や提案を聞き運営に反映している。① 地域活動に興味のある新卒1年目職員が、インド出張に参加した。② 職員の提案で、利用者の皆さんと相談しながら手作りメニューを考案・調理し、利用者からも好評で、今では恒例の取り組みとなっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎月、勤怠簿を確認し、勤務状況を把握している。また、4か月に1回程度個別面談を実施し、各職員の意欲の確認と、チーム、事業所として期待していることを伝えている。給与水準については、労働市場と面談などの結果をもとに、個別に決定している。		
13		代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	各会議体で職員の状況を把握し、必要な研修を設けたり、OJTを実施。また他拠点と連携し月1回以上の研修（オンライン・オフライン）を実施している。		
14		代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	関係機関が実施している外部研修への参加だけでなく、地域包括ケア研究会や連絡会に参加し、地域の関連機関と顔の見える関係性づくりを行っている。初年度だったため、現場職員が参加が難しい状況であったため、次年度以降はより多くの職員が外部の研修にも参加できるよう検討している。		

自己	外部	項目	事業所様自己評価記入欄	外部評価、評価機関記入欄	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前に、本人や家族、担当ケアマネ等と面談を行ったり、利用しているサービスなどの見学を行い、詳細な聞き取りを実施している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	上記に同じ。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	上記の対応に加え、入所後の様子について、看護、リハ、介護、栄養士等の多職種と共同してアセスメントを行っている。また、自宅の環境も参考にするための訪問の実施、家族への協力も努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ケアを考えるうえで共通の基準となる「ケアのものさし」を定めている。特に“もてる力 健康な力を活用し高めるケア”に着目し、本人ができることを尊重とした支援を考え、実践している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ケアコラボという介護記録を通じて、ご家族に介護記録を公開している。オンラインを用いたツールのため、いつでも、どこでも確認することができる。また記録については、家族もコメントすることが出来るので、タイムリーに情報共有、意見交換ができる。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	今現在の様子だけでなく、今までの生活歴、人生観についてご家族等よりヒヤリングを行い支援に取り組んでいる。また、外出など施設から離れなじみある地域に向く機会も実践している。	ナイチンゲールをもとにした理論で構築したケアを実践するためのKOMI理論で使用するツール、レーダーチャートとサークルチャート、生まれてからこれまでの人生を辿りその内容を書き入れたケアプラン、ここへの記録が重要でサービスに反映している。その記録を基に話が膨らみ、隣に住んでいた近所の方が面会に来てくれたときなど、近所に行って確認し安心したいなどと話が弾むこともある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々の特性や嗜好にあわせて相性があう利用者の交流を促している。また健康度や認知症の症状にあわせて職員が介入し、孤立しないように支援を行っている。		

自己	外部	項目	事業所様自己評価記入欄	外部評価、評価機関記入欄	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了・ご逝去などで利用終了となった家族等についても、必要に合わせて情報共有を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ケアプラン作成時に、本人・家族からの希望・要望についてヒヤリングを行いケアプランに反映している。また意見表明が難しい方の場合でも日常の関わりにおいて、何気ない会話、行動を参考に本人らしい支援を複数人で考え、支援方針を検討している。	利用者の希望を踏まえ、入居後も花と触れ合えるよう家族と連携し、生け花を通じて生き生きとした表情を引き出している。また入浴時の「外に出たい」との何気ない言葉を拾い上げ外出支援につなげるなど、職員は日常の声を丁寧に受け止め意向の把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の聞き取りの段階で、今までの生活歴や現在に至る経緯についてを所定の書式を用いてアセスメントを実施している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の実践内容を「KOMIチャート」というアセスメントツールを活用し、視覚的に心身の状態を評価、把握を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプラン作成後は、定期モニタリングを実施し、多職種からも意見を募り評価、支援方法の再検討を行っている。また、ご家族等からも意見を募り現状にあったケアプランを計画している。	KOMIチャートを用いて利用者の状態を多面的に把握し、その結果をケアプラン作成に結びつけている。ケア会議には栄養士、看護師、理学療法士が参加し、栄養士は本人の栄養状態を鑑みて提案するなど、各専門職が自らの専門性に基づき効果的なケアプランを検討している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録については文章だけではなく、写真や動画も合わせて共有し、分かりやすい記録の作成を行い、円滑な情報共有を意識している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	複合型の拠点の強みを生かし、当該サービスの職員だけで解決しようとせず、ニーズにあわせた取り組みを随時おこなっている。		

自己	外部	項目	事業所様自己評価記入欄	外部評価、評価機関記入欄	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	利用者が職員と公共施設へ出向くなどのイベントだけでなく、外食や買い物など入居前にしていた生活の取組も行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	同一敷地内に主治医が在籍している訪問診療あり。2週に1回の定期訪問を実施している。有事には緊急訪問へも対応可能となっている。また先を見据えた生活の方向性の検討を協同して取り組んでいる。	敷地内の在宅クリニックと契約しており、主治医として月2回の訪問診療を受けている。看護師と主治医は24時間オンコール体制を敷き、内科以外も必要に応じ紹介状により専門科受診につなげている。薬局は往診に同行し薬の対応が迅速に行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員と看護職員は常に連携をしてケアに取り組んでいる。医療的ケアが必要な場合は生活の場で提供できる医療体制の確保に努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は相談員が定期的に電話や訪問と通じて本人の状態確認を行っている。また、できるだけ早く退院できるように関係機関との連絡・調整を図っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りを前提とした施設であることを契約時に説明している。また状況にあわせて再度の説明と、主治医と連携し面談などの機会を設けている。	当ホームでは看取りまで行い最後までケアに努めており、今年度は1件の看取りがあった。出棺前には敷地内の児童養護施設の子どもが焼香に訪れるなど地域との強い繋がりが見られる。年間研修には看取り研修を含み、職員は食事量の減少や体調変化を重度化の目安としている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時にはフローチャートに基づいて対応できるように整備している。また、業務用携帯にJCSの明示、無線アプリを活用した連絡を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の総合防災訓練(火災・地震想定)と、2カ月に1回の夜間通報訓練や地震発生時の初動訓練を実施している。	今年度も総合防災訓練が実施され、消防署立ち合いのもと利用者も参加し、車いす利用者には担架や救助袋で対応している。BCP訓練では資料の読み合わせを行い、緊急連絡チャートの確認を通して災害時の対応手順を再確認している。	

自己	外部	項目	事業所様自己評価記入欄	外部評価、評価機関記入欄	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「マナーアップ5か条」を掲げ、朝礼時や勤務開始前に唱和するようにして意識を高めている。内容にそぐわない言動が確認された場合、不適切なケアとし、マネジメント職から注意・指導を行っている。	職員は「明るい笑顔で元気にあいさつ」「正しい言葉遣いと敬語の使用」などのマナーアップ五カ条を厳守し、利用者の尊厳を守る姿勢を徹底している。五カ条には目線を合わせた説明や氏名で呼ぶこと、指示的表現を避けることも含まれ、言葉の乱れが虐待につながらぬよう常に意識している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入職時の研修にて、「自己選択・自己決定」考え方について説明を行っている。また、Off-JTの中に「認知症」に関する項目もあるため、今後はできるだけ多くの職員が参加できるように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	法人理念として「すべての人の可能性を広げる」を掲げており、利用者を軸とした支援を日々検討し、実践することを務めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	天候や気分に合わせて利用者本人が選ぶことができる支援に取り組んでいる。また、整容については健康状態にも関わることを職員に伝えている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事を食べるだけでなく、調理、盛り付け、片付けといった一連の家事も一緒に実施している。また、レクとして献立と一緒に考え、好みの献立の調理、食事も実施している。	上げ膳据え膳では食への関心が薄れるため、本人の持てる力を生かしつつ職員はその力を奪わぬよう適度な手伝いを行っている。レクでは希望を聞きお好み焼きやたこ焼きを楽しみ、外食も月1回程度家族とファミリーレストランや回転ずしに出かけている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	健康状態に合わせて食事内容を見直し、食事を提供している。また、食器や座り方などの環境面にもアプローチした支援にも力を入れている。それらの結果については記録を行い、記録をもとに変化に気づけるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食口腔ケアを行っている。心身の状態に合わせて介助量を調整している。また、希望者については、訪問歯科を利用し口腔内の清潔を保持している。		

自己	外部	項目	事業所様自己評価記入欄	外部評価、評価機関記入欄	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを分析し、介入の時間や使用するオムツ類を都度検討している。できる限りトイレで排泄ができるように支援している。	尊厳を守り自然な排泄行為を支えることを排泄の自立支援と捉え、職員は介護記録の排泄項目を確認しながら適切にトイレ誘導を行っている。こまめな自立支援を継続することで介護への拒否が少なくなる傾向も見られ、利用者の安心につながっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便間隔を記録に残し、食事・水分量の見直し、薬剤の調整を行っている。また、運動をすすめるなどし、自然排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回、日中に入浴を行っている。個浴、リフト浴、寝台浴など健康状態にあわせての入浴環境の調整を実施している。また、入浴剤や好みの音楽などを活用しリラックスできる環境づくりに努めている。	浴室は個浴、リフト浴、寝台浴の3種が整備され、利用者の健康状態に応じた入浴が可能である。照明は暖色系を用い、入浴剤も活用するなど温かみのある環境づくりを行っている。入浴中は利用者が最も気を許す時間でもあり、普段聞けない話が出るなど情報把握の機会にもなっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	定時介入ではなく、個々の生活リズムにあわせて入眠介助を行っている。また入眠介助時には寝具に更衣している。睡眠リズムに乱れがある場合は、表などを活用し睡眠状況をモニタリングし医療的アプローチも検討している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬上記法は紙ファイルの他、記録で見れるようにしている。また、内服事故を防ぐために「内服介助6か条」の研修を行い、適切な服薬支援が行えるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々の利用者の得意なことを生かし、調理、洗濯、掃除などの家事などに積極的に取り組んでいる。また、室内だけでなく室外に足を伸ばし、散歩の促しも行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	散歩や外出の他に、職員の用事(物品補充)と一緒に同行し、外部環境と触れる機会を作っている。またご家族にも協力していただき、外出、外泊なども行っている。	ホームは敷地が広く、日常的に敷地内での散歩が行われ、近くの公園への外出やデイサービス送迎車でのドライブも実施している。職員が図書館やホームセンターへ同行することもあり、家族が連れ出して孫と出かけたやお墓参りや結婚式に同行する姿も見られるなど、外出の機会が広がっている。	

自己	外部	項目	事業所様自己評価記入欄	外部評価、評価機関記入欄	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人の希望と、ご家族の同意のうえでの管理をお任せしている。自動販売機や買い物などを本人が選択して購入できるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話の持ち込みは自由となっているため、本人・家族の希望があれば利用可能となっている。また手紙などについても希望があれば対応可能。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	自然の光、空気を取り込めるような施設構造となっているため、四季折々の景色、空気を味わうことができる。また、体感だけでなく、室温計の設置などで視覚的に適切な環境かをモニタリングしている。	自然に恵まれた立地にあり、リビングからは季節の移ろいが感じられ利用者の目を潤している。建物は自然光や外気を取り込む構造で、リビングで過ごす時間に清々しさが生まれている。フロアは段差がなく、スイッチ操作も車いすで行いやすい造りとなっており、利用者への配慮が徹底されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	上記に同じだが、広々とした空間となっているため気分にあわせた居場所の活用ができる。ただし、利用者同士の相性もあるため、時間を分けたり、場所を離すなどの工夫を行い、お互いが居心地の良い環境づくりに配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	住み慣れた場所で利用していた物品などの持ち込みを許可しているため、家具や調度品、思い出の品を持参いただく家族も多い。	安心して過ごせる自分の部屋づくりのため、馴染みの物を持ち込めるよう配慮している。利用者の中には各居室を行き来する姿も見られる。睡眠以外の時間には、居室でテレビを見たり読書をするなど、落ち着いて過ごす場として活用されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	日中は危険な場所を除き原則施錠をしておらず、自由に利用できるようにしている。配慮が必要な箇所についてはカメラの設置、また無線アプリなどを活用して他部署にも協力を仰ぎ安全な環境づくりに努めている。		